

私の戦争体験

安藤 淳

1 開戦の日

私は上川郡東川村（現：東川町）の西はずれ、上川盆地の農村で育った。小学校は1学年35人、全校児童280人余の小さな学校で、のんびりと学校生活を送っていた。

小学校1年に入った時は、日本と支那との戦争中（日中戦争）。4年生の時、アメリカ・イギリスなどの連合軍に対し宣戦布告（真珠湾の攻撃）をした。北海道の真ん中に位置する上川盆地の旭川に第七師団があったが、農村では戦争中という感じはあまりなかった。私が入った時の学制は尋常高等小学校で、1年生の国語の教科書は「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」で始まり、「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」などが続いた。その後、国民学校に変わると、1年生の国語の教科書も『アサヒ読本』になり、教科内容がますます戦時色を強くしていき、音楽は軍歌が中心になった。

支那（しな）

現在の中華人民共和国またはその一部の地域に対して用いられた地理的呼称。語源については諸説あるが、中国大陆中央部初の統一王朝である「秦（しん）」の呼称が周辺国に伝わった際、現在のインドで「シナ」に変化したと考えられている。英語のChina（チャイナ）の語源でもあると考えられている。

尋常高等小学校（じんじょうこうとうしょうがっこう）・国民学校（こくみんがっこう）

明治19（1886）年に公布された小学校令によって設置された、尋常小学校（修業年限4年）と高等小学校（修業年限4年）の教科とを、一校に併置した小学校のこと。

昭和16（1941）年、国民学校令により、従来の尋常小学校と高等小学校が改組され、国民学校初等科（修業年限6年）・高等科（修業年限2年）となった。

昭和22年、教育基本法、学校教育法が制定・公布され、学制改革（六・三制の実施）により、国民学校が廃止され、国民学校初等科は新制小学校に、国民学校高等科は新制中学校に改組された。

アサヒ読本（とくほん）

昭和16（1941）年から昭和20年まで、国民学校初等科で使用された教科書。「アカイ アカイ アサヒ」で始まることから、一般に『アサヒ読本』と通称された。

先生の話も、国のために死ぬことが美德、という思想教育をだんだん強めていき、私たち小学生にはそのようなことは解らなかったが、子ども心にも国のため、天皇陛下^{へいか}のために死ぬことは当然と私も思っていた。

しかし、子どもたちの日常生活は、農村であったせいか楽しく、のびのびとしていた。先生のほとんどは、中等学校を出たばかりの代用教員で、しかも、戦時中で中等学校の修業年限は、小学校6年卒業から5年のところ、戦時中で4年に短縮されたので、高等科2年の私たちとの歳の差も3歳か4歳で、友達のような関係で勉強もあまり厳しくなく、米や野菜を持って、先生の自宅に遊びに行き、いろんな話をしてもらった。食糧は、農家なので豊富にあり、空襲も砲撃も無かったので、戦争は、どこか遠い国の出来事のように感じていた。

昭和16(1941)年12月8日、朝起きたら、父からアメリカと戦争が始まったと教えられ、急いで学校へ行った。校門を入ると奉安殿があり、そこで深々と一礼、そこから北側の玄関まで校庭の中を歩く。その日は雪は降っていなかったが、風がある中、マントを身体に巻き付けて行った。校庭が地吹雪で粉雪が表面を波打って飛んでいく様子が、目の奥に今でも焼き付いている。教室は3・4年の複式で、玄関を入った角の暗い少し広い教室で、その日は机の上に教科書も出さず、教室の横の柱に取り付けられたスピーカーから流れる「臨時ニュースを申し上げます。帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋上において、米英軍と戦闘状態に入れり」の放送を一日中、何度も聞かされ、先生は教室に入ったり出たりして勉強はしなかったことを覚えている。

奉安殿（ほうあんでん）

各学校に下付された「教育勅語」の謄本（とうほん）と、天皇・皇后両陛下の「御真影（ごしんえい）」（写真）とを、最も丁重に奉置するための建物。「少国民」（国民学校の児童たち）は、登下校の際には必ず、この奉安殿に最敬礼をすることとされた。

帝国（ていこく）

大日本帝国の略。江戸時代末期ごろから、現在の日本国を表す国号として外交文書等を使用され始め、明治22(1889)年の大日本帝国憲法発布によって国号として位置付けられた。その後、昭和22(1947)年の日本国憲法発布まで、国号として使用された。

2 援農の思い出

太平洋戦争は昭和 16（1941）年に始まったが、それ以前から、出征兵士を送る壮行会が校庭で行われていた。私たちの校下は水田地帯なので、夏の草取り、秋の稲刈りなどの時期には、一家の主人や若い男性が兵隊としていなくなったために仕事ができないで困っている家に、4年生以上が手伝いに行った。いわゆる援農である。現在のように機械や農薬はなく、すべて手作業、人力である。草取りは、稲が 15 センチくらいに生長すると、「一番草取り」と言って、家族が並んで田んぼに入り、一人で稲の 4 列から 5 列を受けもって、手で稲の周りの草を取り、土の中へ押し込んでいく作業である。私たちは、前日に、「明日は援農で何処^{どこ}の家^どに手伝いに行く」と先生から告げられると、おにぎりだけを持って登校、教室で出席を取ったら並んで遠足のようにその家庭に行き、指定された田んぼで午前中は草を取り、お昼には、その家庭で作った味噌汁とおにぎりを食べた。

小学生は午前中のみの作業で、高等科は午後も手伝った。作業中でも皆でふざけたり、田んぼの中でケンカして先生に見つかり、泥のついた手でホッペタを叩かれ顔が泥だらけの児童も稀^{まれ}ではなかった。当時の草取りは、「二番草取り」は手押しの機械で、「三番草取り」は一番草取りと同じように人が田んぼに入り草を取った。この頃になると稲も大きくなり、稲と小さな時見分けのつかなかった「ヒエ」が大きくなっているので「ヒエ」抜きが行われる。

援農（えんのう）

食糧増産のかけ声のもと、男手を戦地にとられた農家を支援するために、学生などが農村に動員された。これを「援農」といい、当時の美唄町でも道内、道外からの援農に多数の人が来ていた。

また、秋になると稲刈りで、これも草取りと同じように、児童が援農として手伝いに行った。小学生は刈り取るだけ、高等科になると、刈った稲をワラで束ねていき、最後は稲を乾燥させるために、ハサに架けるまで行った。現在のように草取りは薬剤で除草したり、稲刈りは、現在はコンバインで行えば早くきれいに行えるが、当時はすべて人の力。だから小学生でも、銃後の守りとしての農業の手伝いが大きな力となった。それに、皆それぞれの家庭で手伝いをさせられているので、児童・生徒が集団で援農に行っても、先生より上手に仕事をこなした、そんな時代であった。

昭和 20（1945）年に入ると、東川町にも警戒警報が発令されるようになり、援農に行っても警戒警報が発令されると、現地からまっすぐ帰宅させられるようになり、警戒警報が出ると仕事も勉強もしないで良いと内心喜んだものである。今思えば援農での若い先生とのふれあいや、友だちとの断片的な思い出がとても懐かしい。

ハサ

収穫した稲を掛け、天日干しにして、乾燥させるための農具。

銃後（じゅうご）

戦場の後方。戦場になっていない国内又は戦闘行為に直接加わらない一般国民のこと。戦地に赴いた夫の留守を守る妻や家族の生活も「銃後」と言った。また、戦地の将兵や、出征兵士たちの家族、戦地で負傷した人びとを、思いやり、支えることも、銃後の国民のつとめとされ、戦地の兵士へ慰問文や慰問袋を送ること、働き手が出征してしまった農村へ勤労奉仕に行くことなどが、呼びかけられた。「兵隊さんは戦地で命がけ、私たちは銃後でタスキがけ」という標語もつくられた。

警戒警報（けいかいけいほう）

敵機襲来の目的地がつかめないうち、サイレンなどにより、警戒を呼びかけた。より切迫した敵機来襲の場合に発令される「空襲警報」の２段階で警報が出される仕組みになっており、「防空警報」と総称された。

3 突然の空襲

国民学校高等科2年、毎日、音楽は軍歌を習い、戦意高揚と日本国のために鬼畜米英を「撃ちてし止まむ」の教育を受けていたが、イタリアが降伏、やがてドイツも降伏、との新聞記事を見て、友だちと心細くなったと話したが、日本だけでアメリカやイギリス、オランダと戦うが、負けるという事は考えられなかった。

しかし、昭和20(1945)年7月15日頃だったと思うが、正午近く、晴れた南東にある、十勝岳連峰に浮かぶ積雲の中から突然、アメリカのグラマン機が低空で飛来した。14歳の少年だった私は恐ろしさも知らず、道路に出て、空を見上げたら、操縦席のアメリカ兵が認められるほど低空で飛行していた。あとから、夢か幻か、操縦席のアメリカ兵が見えたように思うが、と人に話すと、見えるはずがないと言われたが……。ちょうどお昼寸前で、田の草取りから昼食のために、家の方に歩いていた。向かいの長瀬さんのお母さんは、ビックリと恐ろしさで田んぼの畦^{あぜ}に伏せて、飛び去るまで待っていた。そして飛び去ってから「淳ちゃんおっかなかったね、大丈夫だった。」と声をかけてくれた。

旭川の方へ飛び去ったので、窓から父と母と義姉と4人で、旭川の方を見ていた。アメリカのグラマン機は、新旭川駅に隣接する国策パルプ旭川工場を標的に急降下、腹に抱えた爆弾を落とし、その瞬間に黒い煙が出るのを母は、「恐ろしい」といって眺めていた。

鬼畜米英（きちくべいえい）

戦時中、敵国であるアメリカおよびイギリスに対するスローガンとして、新聞雑誌等において用いられた語。主にアメリカ軍の行動を中心に、同国の残虐（ざんぎやく）性を宣伝した。この他、学校の教室の前面には、「対米決戦大空知総進軍」などの標語もはられていた。

撃ちてし止まむ（うちてしやまん）

太平洋戦争中の戦意高揚のスローガン。「敵を撃たないでおくものか」、つまり、敵国であるアメリカやイギリスを撃滅するという意味。陸軍省は昭和18(1943)年に5万枚のポスターを作成し、町内や職場に掲示した。前線だけでなく、銃後の生産戦に向けてのスローガンでもあった。この年の標語はこのほかに、「頑張れ！敵も必死だ」があった。

旭川師範学校（現：北海道教育大学旭川校）へ行っていた兄の話では、旭川の通りで、市民に向けて敵機の機銃掃射が行われたと言っていたが、死者や負傷者が出たかは覚えていないとのことだ。

また、その頃、同じく兄の話では、ある晩、旭川の北海道護国神社で、真夜中に玉砂利をザクザクと踏んで正面の鳥居から、第七師団の中から南方戦線へ派遣された部隊の兵士が帰還、護国神社の宮司^{ぐうじ}は急いで神官の装束^{しょうぞく}に着替え出迎えた、という出来事があった。兵士は隊列を組んで整然と神前で拝礼し、終わるとそのまま忽然^{こつぜん}と消えた。それがアツツ島で玉砕した英霊の帰還ではないかと、もっぱらの噂^{うわさ}であったとのことだ。

4 終戦の日

終戦の日、今から考えると遠い遠い昔の思い出である。昭和 20（1945）年 8 月 15 日は、とても暑い日であった。午前中はよく晴れて、じりじりと遅い夏の太陽が照りつけ、庭の花畑^{おにゆり}の鬼百合に、大きな黄色いアゲハ蝶が舞っていたのが、今でも目の底にはっきり焼き付いている。ちょうど 12 時。重大発表があるということで、家族がラジオの前に勢揃い^{せいぞろ}をした。ラジオから流れてきたのは、あの独特な抑揚^{よくよう}の天皇陛下の声であった。

機銃掃射（きじゅうそうしゃ）

機関銃によって目標を射撃すること。特に航空機から地上の対象を攻撃すること。

玉砕（ぎょくさい）

戦時中、日本軍部隊の全滅を表現する語として、公式発表等で用いられた。

英霊（えいれい）

特に戦死者の霊を敬っている語。

雑音の上、言葉が難しく、高等科2年の私には、その内容が十分にわからなかったが、戦争に負けたと父や兄が話してくれた。午前中、晴天で暑かったのが午後からは曇りとなり、夕方には、空がどんよりと曇り、とても陰鬱いんうつになった。友達の家に行ったがいつものように、楽しく遊ぶことも出来ず、話に出るのは「アメリカ兵がきて、男はみんな殺される」とか、「お金は使えなくなる」などということが、誰言うとなく耳に入り不安になってきた。

当時、学校では、鬼畜米英と呼び合っていたため、アメリカ兵は鬼のような人と思っていたから、私たちはこれからどうなるだろうと、とても恐ろしく思っていた。だから、アメリカ兵が来て、日本人がどのようにされるかという話ばかりして、気持ちが暗くなって帰ってきた。このようにして、長い一日が暮れていった。

夏休みが終わって2学期の始業式の日、学校で先生からどんな話があったかは記憶にないが、終戦の日の話が現実のものとならず、平穏に過ぎていったことは幸せだった。

(あんど う　じゅん　昭和6（1931）年　上川郡東川町生まれ）